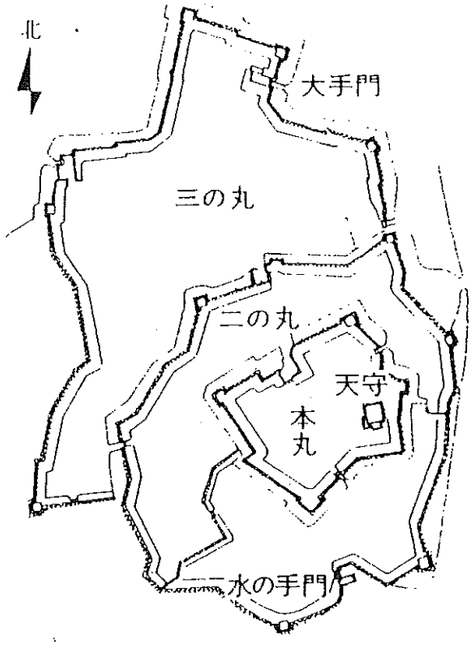
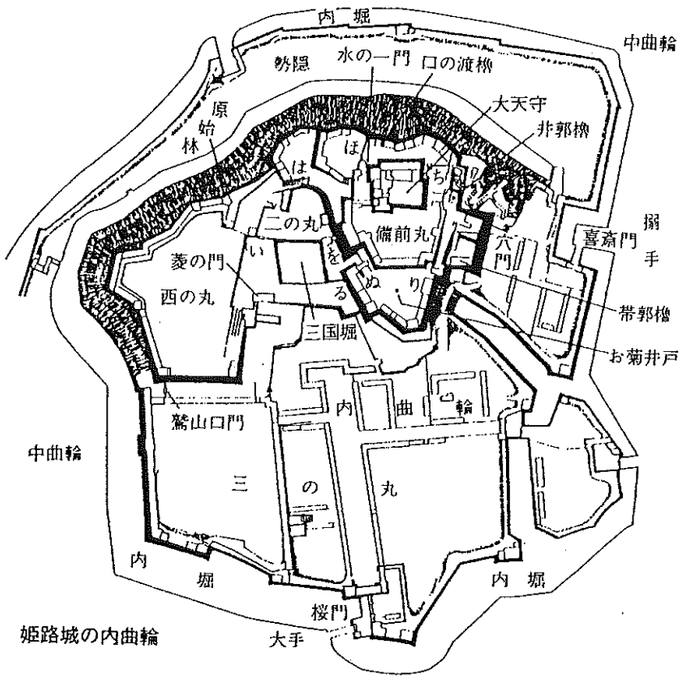
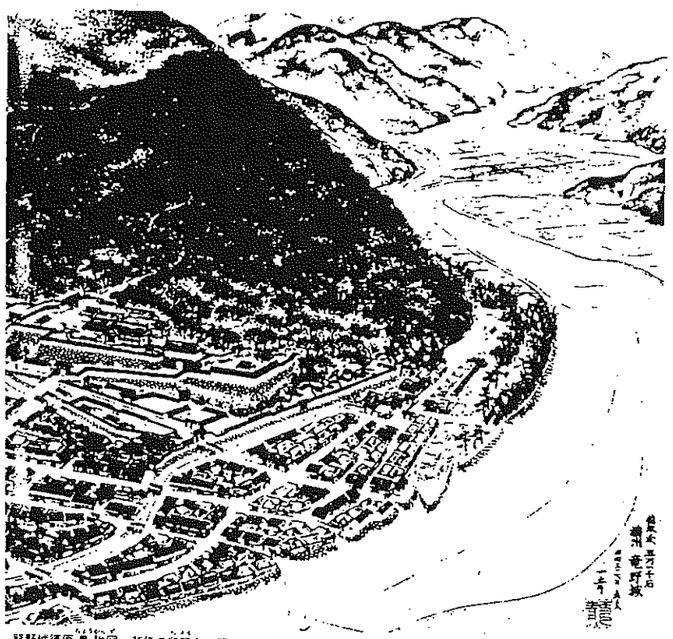


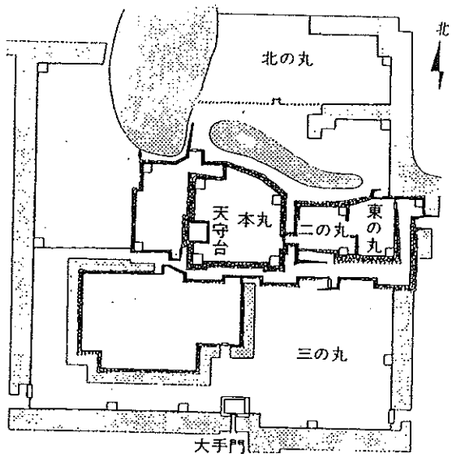
赤穂城



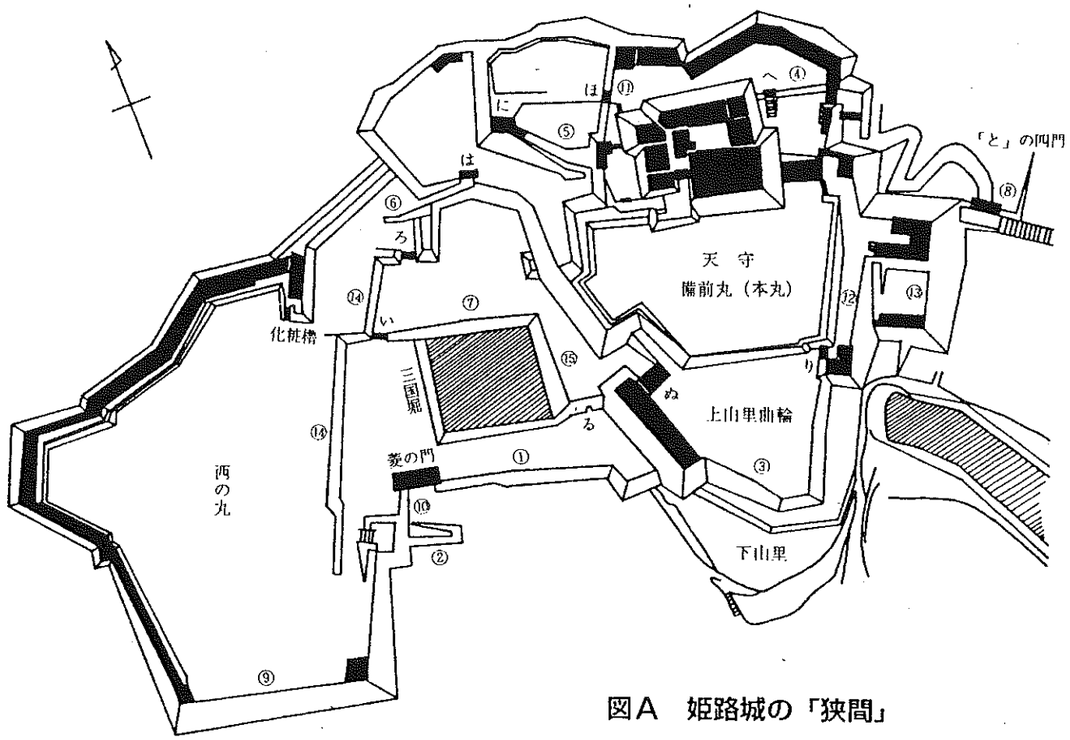
姫路城の内曲輪



龍野城復原鳥瞰図　背後の鶏籠山が戦略的拠点だった様子が、よくわかる（荻原一青画）

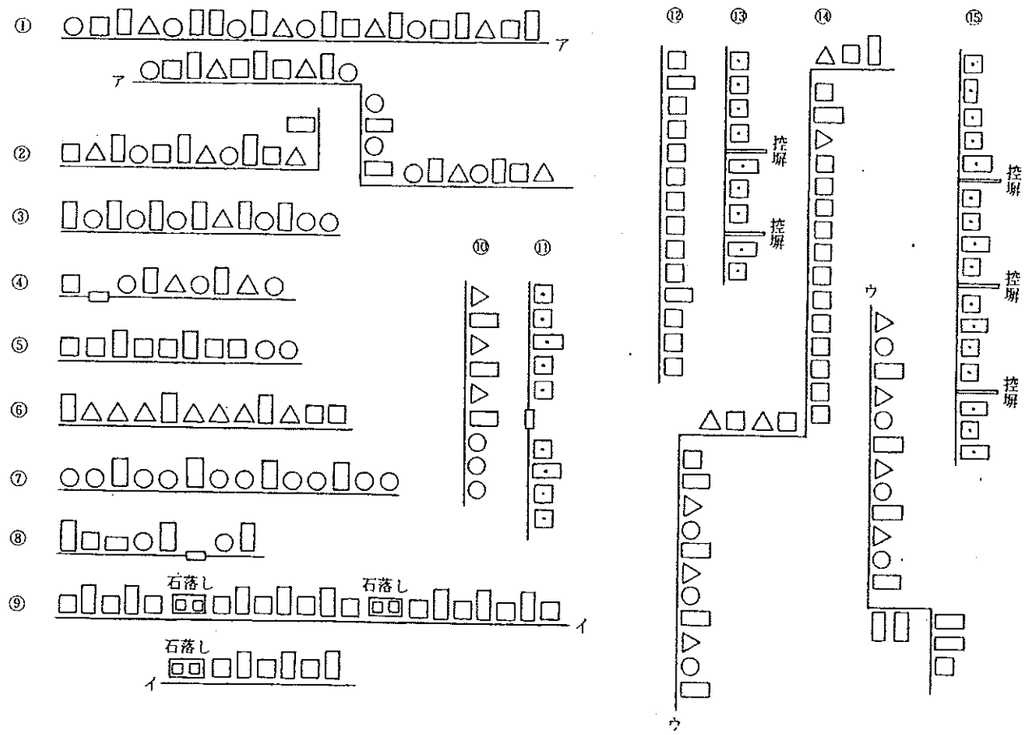


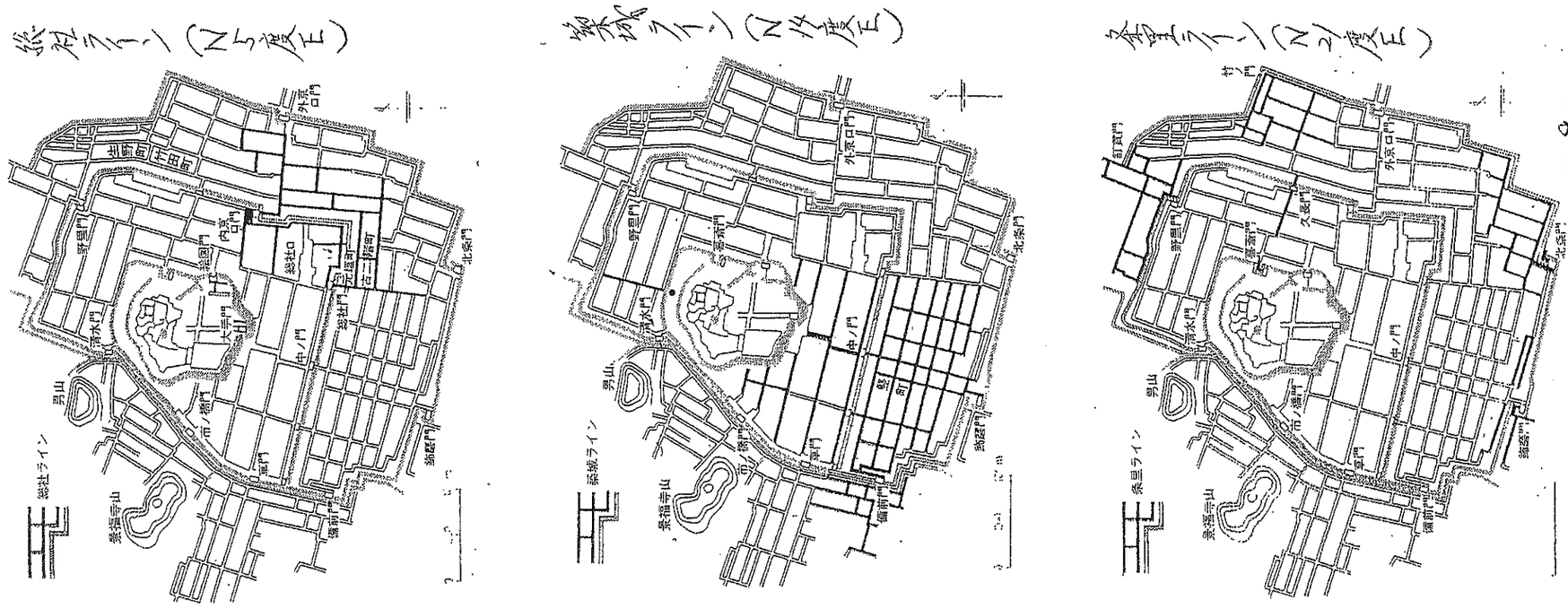
連郭式縄張（明石城）

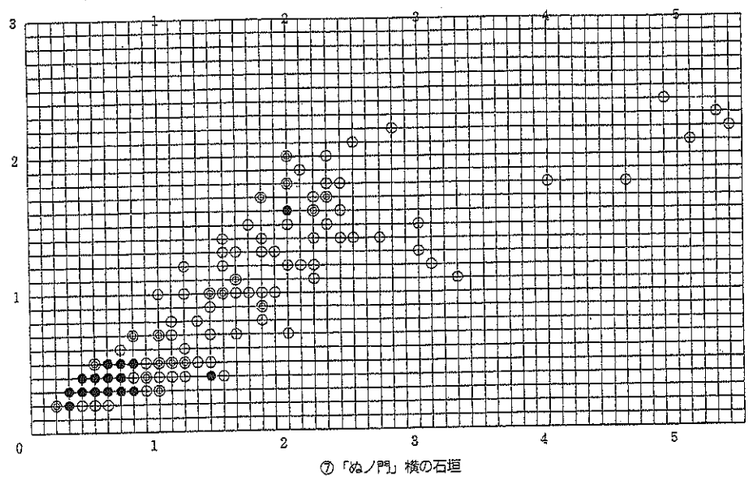


図A　姫路城の「狭間」

※中黒丸印は蓋付きの「狭間」



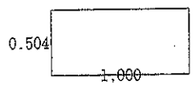




⑦「ぬノ門」横の石垣

・『古い』方の石垣（⑧）は、石の大きさのバラツキが大きいのに対し、『新しい』方の石垣（⑦）は、バラツキが少ない。つまり、大きさのまとまった石が比較的多い。

・『古い』方の石垣（⑧）の石は、平均して・・・・・



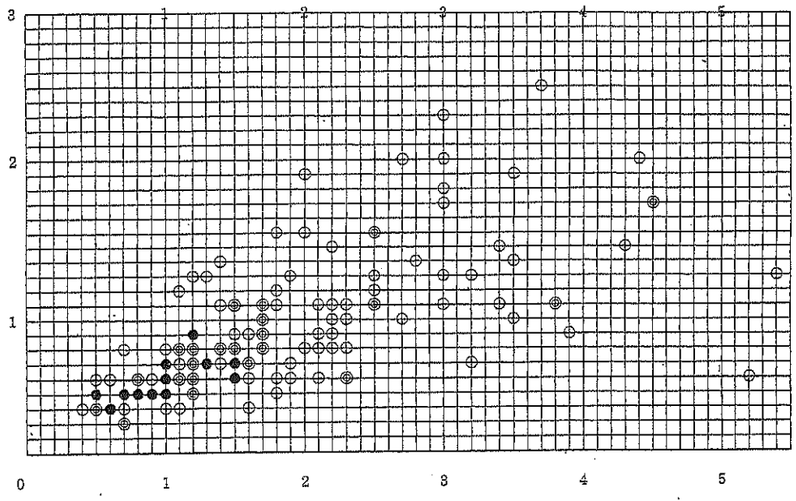
（横に長い石が多い）

『新しい』方の石垣（⑦）の石は、平均して・・・・・

（一部、横に長い石があるが、より正方形に近い石が多い）

(4) 今まで、姫路城といえば「天守閣」のところしかイメージが浮かばなかったけれど、この石垣調査を通して、姫路城は「石垣」など土台の部分が非常に重要な役割を果たしていることに気が付いてきました。いかにして崩れない、頑丈な石垣を造るか、工夫に工夫を重ね、巨大な建築物を支える土台を造ってきたことが分かってきた。姫路城には、時代とともに発達してきた石垣が“発達順に”残っているので、いろんな石垣に出会えてよかったと思います。

(5) 1年間ずうっと、姫路城の石垣に注目してきた。不思議なことに、姫路城は漠然と広いイメージがあったが、石垣の造られた時代が分かるにつれて、姫路城の一つ一つの場所が僕の頭の中に入ってきた。そして、造られた時代によって、“ひとつ”だった石垣が一つ一つ違うことも分かってきた。各所の石垣を写真にとって、一つ一つの石を定規で図ってグラフ化していくと、石垣がみんな違っていること、しかし、時代によって、明らかな共通した特徴があることが発見できて楽しかった。



⑧「リノー櫓」下の切れ込みのある石垣（右・古）

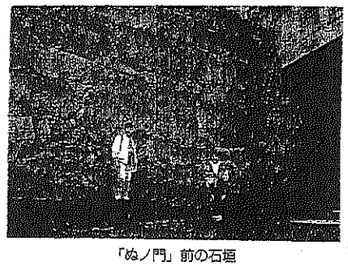
(ア) ・秀吉の時代は、ゆっくりと城を建てる余裕はなかった。当然、石垣にも、悠長に時間をかけることができなかったため、自然石を切って形を整えることもできず、それもできるだけ大きな石を使う必要があった。

(イ) ・姫路城には、重要な門が数多くある。「菱ノ門」や「ぬノ門」・・・こういう重要な門のそばには、大きな石がたくさん埋めこまれていることに、気が付いた。これは、多分、大きな石を置いて自分の城の立派さをＰＲして、相手を驚かす目的もあるのではないかと思う。

(ウ) ・櫓門である大きな門（「菱ノ門」「ぬノ門」）の近くには、大きな石が使われている。これは、いかにもガッチリした大きな石を使うことによって、城の城主の財力やら偉大さを見せつける効果があると思う。

(エ) ・この石垣が造られた時期は石垣を造る技術がまだ未熟で、大きな石を並べて、小さな石を適当に埋めている感じがする。だから、規則性がまだ見いだせない。

(オ) ・ここには、苔が生えている大きな石垣がたくさんあることから、ここの石垣が姫路城の中でも最も古い石垣ではないかと思う。だから、ここ姫山周辺の岩石をそのまま用いて、京都のお寺のように“わび・さび”の趣を出しているのだと思う。



「ぬノ門」前の石垣

(カ) ・小さな石や中くらいの石の上から押さえ付けるように特別大きな石を置くことによって、強度を高める役割を果たしていると思う。

世界遺産 姫路城をしらべる Ⅱ（戒心喉事業）より